

# **下大五郎遺跡 B地区**

**丸谷地区県営ほ場整備事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書**

1996.3

**宮崎県教育委員会**

## 序

日頃より埋蔵文化財の保護、活用に関しては深いご理解とご協力をいただき、厚くお礼申し上げます。

さて、宮崎県教育委員会では、宮崎県北諸県農林振興局の依頼を受け、都城市の下大五郎遺跡の発掘調査を行いました。本書はその発掘調査報告書です。

この調査では、室内に間仕切り壁を持つ竪穴住居跡など、弥生時代後期の集落の一部が確認され、遺構内より完形の土器や石器が出土しました。また、上層からは近世の陶磁器類も出土しており、いずれも当地域の歴史の解明のための貴重な資料となるものと考えます。

本書が学術資料としてだけではなく、学校教育や社会教育の場においても広く活用され埋蔵文化財保護の一助になることを期待します。

なお、調査にあたってご協力いただいた関係諸機関をはじめ、ご指導ご助言をいただいた先生方、ならびに地元の方々に心から感謝の意を表します。

平成8年3月

宮崎県教育委員会

教育長 田 原 直 廣

## 凡　例

1. 本書は、平成2年度に宮崎県教育委員会が実施した、丸谷地区県営ほ場整備事業に伴う下大五郎遺跡B地区の発掘調査報告書である。
2. 下大五郎遺跡に関しては同じ平成2年度に、今回報告を行うB地区の北側に隣接する範囲について、中小河川改修事業に伴う発掘調査が実施されている。そのため、混乱を避けるべく、遺構の番号にBの文字をかぶせ、B1号住居跡…という具合に標記した。
3. 本書の執筆・編集は、吉本正典が行った。
4. 本書で使用した遺構実測図等の現地における記録は吉本による。一部、阿久根昌子の補助を得た。
5. 本書で使用した写真は吉本による。
6. 本書における方位は、第1図・第2図を除き、全て1991年における磁北である。第2図のそれはグリッド北である。
7. 第1図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図『庄内』による。
8. 層位の説明中の土色の標記は、小山正忠・竹原秀夫編・著 「新版標準土色帳」を参考している。
9. 近世の陶磁器については、佐賀県立九州陶磁文化館学芸課長 大橋康二氏より御教示をいただいた。
10. 出土遺物および調査記録類は、全て宮崎県総合博物館埋蔵文化財センターに保管している。遺跡の略号はSDGⅡ、遺構のうちB1号住居跡とB2号住居跡の略号はそれぞれSA1とSA2である。

## 本文目次

第Ⅰ章 はじめに.....	1
第1節 調査に至る経緯.....	1
第2節 調査の組織.....	1
第3節 遺跡の位置と環境.....	1
第Ⅱ章 調査の記録 .....	4
第1節 調査区の設定と層序.....	4
(1) 概要.....	4
(2) 層序.....	4
第2節 弥生時代の遺構と遺物.....	9
(1) 堅穴住居跡.....	9
(2) 遺物.....	15
第3節 古代～近世の遺構と遺物.....	21
第Ⅲ章 まとめ.....	21
図版.....	23

## 挿図目次

第1図 遺跡の位置及び周辺地形.....	2
第2図 調査区の位置.....	5・6
第3図 遺構分布図(1) .....	7
第4図 遺構分布図(2) .....	8
第5図 層位断面図(1) .....	10
第6図 層位断面図(2) .....	11
第7図 層位断面図(3) .....	12
第8図 1号溝断面図.....	13
第9図 B 1号住居跡実測図.....	14
第10図 B 1号住居跡出土土器実測図.....	15
第11図 B 2号住居跡実測図.....	16
第12図 B 2号住居跡出土土器実測図(1) .....	17
第13図 B 2号住居跡出土土器実測図(2) .....	18
第14図 包含層出土遺物実測図.....	18
第15図 表土・包含層出土遺物実測図.....	19

## 報告書抄録

フリガナ 書名	シモダイゴロウ 下大五郎遺跡 B地区
副書名	県営ほ場整備事業（丸谷地区）に伴う埋蔵文化財調査報告書
シリーズ名	――
編集者名	吉本 正典
著者名	吉本 正典
発行機関	宮崎県教育委員会
所在地	〒880 宮崎市橋通東1丁目9番10号
発行年月日	1996年3月31日

所取遺跡名	所在地	緯度	経度	
下大五郎遺跡 B地区	宮崎県都城市丸谷町字 下大五郎1495番地1外	北緯31°48' 16"付近	東経131°4' 56"付近	
調査期間	調査面積	調査原因	種別	主な時代
901219~910208	1996m <sup>2</sup>	ほ場整備事業	集落跡	弥生時代・近世
主な遺構		主な遺物	特記事項	
竪穴住居跡2・溝		弥生土器・石器・近世陶磁器	住居跡に間仕切り	

# 第Ⅰ章 はじめに

## 第1節 調査に至る経緯

下大五郎遺跡は、昭和63年度の都城市教育委員会による遺跡詳細分布調査により確認され、その時点では近世の遺物散布地と認識されていた。

この地区では、県営の丸谷地区は場整備事業（124haの水田が対象）が昭和62年度から平成8年度までの計画で進められており、平成2年度の工事予定範囲内に下大五郎遺跡と山ノ田第1遺跡が所在し、その他にも遺跡が所在する可能性があった。そこで、宮崎県教育委員会による分布調査が実施され、丸谷川左岸側など2遺跡以外の遺物散布地が確認された。それを受け、遺跡の性格や残存状況を知るための試掘調査が平成元（1989）年12月5日から12月8日までの間、宮崎県教育委員会により実施された。

試掘調査の結果、下大五郎遺跡部分においては御池ボラの上位の黒色土中から弥生時代後期の土器や土師器の皿、青磁などの古代～中世の遺物が出土し、該期の文化層が遺存することが確認された。

以上の結果をもとに、宮崎県教育委員会は宮崎県北諸県農林振興局と協議を行い、工事予定範囲がほぼ平坦であり、区画整理は畦畔の移動程度で遺物包含層に影響を与えない計画であつたため、農道部分のみを発掘調査の対象とすることになった。

発掘調査は平成2年12月19日～平成3年2月8日までの期間、宮崎県教育委員会により実施された。

## 第2節 調査の組織

調査組織は以下の通りである。

教 育 長	児玉 郁夫
教 育 次 長	増井 彰宏
	高山 義孝
文 化 課 長	梨岡 孝
課 長 補 佐	片野坂次彦
主幹兼庶務係長	小倉 茂光
埋蔵文化財係長	岩永 哲夫
〃 主査	面高 哲郎
（調査担当）	
〃 主事	吉本 正典

## 第3節 遺跡の位置と環境

下大五郎遺跡は宮崎県都城市丸谷町字下大五郎1495番地1外に所在する（第1図）。都城市は宮崎県の南西部に位置する、都城盆地の中心都市である。盆地の西～南西側には霧島連山が



- |                  |                 |             |            |
|------------------|-----------------|-------------|------------|
| 1. 下大五郎遺跡        | 2. 下大五郎遺跡 (B地区) | 3. 上大五郎遺跡   | 4. 本池遺跡    |
| 5. 谷ノ口遺跡         | 6. 中大五郎第2遺跡     | 7. 中大五郎第1遺跡 | 8. 下川原遺跡   |
| 9. 前烟遺跡          | 10. 山ノ田第1遺跡     | 11. 丸谷第1遺跡  | 12. 丸谷第2遺跡 |
| 13. 下蔭遺跡         | 14. 堂山遺跡        | 15. 屏風谷第1遺跡 | 16. 志和池城址  |
| 17. 神竹遺跡 (児玉屋敷跡) |                 | 18. 野々美谷城址  |            |
| ▲県指定志和池古墳群       |                 |             |            |

第1図 遺跡の位置及び周辺遺跡

そびえる。

遺跡は大淀川の支流の丸谷川の右岸（南側）の標高約140mの低位段丘上に立地する。付近には、特に弥生時代から中世にかけての遺跡が多く分布しており、近年増加している発掘調査の成果として、地域史を解明する上で欠かせない重要な資料が遺跡自身の消滅と引換えに数多く得られている。

既に報告がなされた上大五郎遺跡<sup>1)</sup>では、最盛期には「コ」字形の平面形の二条の溝（堀）で囲まれた館址の全容が明らかにされた。館内への入口通路や門と推定される柱穴も検出されており、中世館址の構造や変遷を窺い知ることのできる重要な遺跡と言える。

平安時代から中世にかけての遺構・遺物は、上大五郎遺跡に隣接する本池遺跡<sup>2)</sup>でも確認されている。

弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての遺跡も数多く知られるようになった。中大五郎遺跡<sup>3)</sup>、前畠遺跡<sup>4)</sup>、山ノ田第1遺跡などである。いずれも竪穴住居跡や掘立柱建物、周溝状遺構などにより構成される集落址で、本遺跡同様、丸谷川右岸の低位段丘上に立地する。なお、丸谷川左岸の高位段丘上には、若干古く、九州自動車道（宮崎線）の建設に伴って発掘調査の行われた丸谷第1遺跡<sup>5)</sup>が所在する。弥生時代後期（終末期）の竪穴住居跡が2基検出されている。

それら該期の竪穴住居跡の中では、とりわけ弥生時代後期に盛行する間仕切り壁を有するもの（「花弁状平面住居」「日向型間仕切り住居」と称される）が注目される存在である。都城市内では他に、祝吉第1遺跡<sup>6)</sup>・第2遺跡<sup>7)</sup>、向原第1遺跡・第2遺跡<sup>8)</sup>、牟田ノ上遺跡<sup>9)</sup>などで検出例が報告されている。

谷ノ口遺跡、下川原遺跡では中世以降の水田閑連遺構が検出されている。丸谷川左岸の低位段丘上の遺跡である。

#### （文献）

- 1) 都城市教育委員会 1995 「丸谷地区遺跡群 上大五郎遺跡」 都城市文化財調査報告書 第31集
- 2) 同上 1993 「丸谷地区遺跡群 上大五郎遺跡」 都城市文化財調査報告書 第22集  
本池遺跡は当初、上大五郎遺跡として報告された。
- 3) 同上 1992 「中大五郎第1遺跡・中大五郎第2遺跡」 都城市文化財調査報告書第20集
- 4) 同上 1994 「上大五郎遺跡・前畠遺跡」 都城市文化財調査報告書第26集
- 5) 丸谷地区遺跡群の中大五郎遺跡・前畠遺跡については1996年に報告書刊行の予定
- 6) 宮崎県教育委員会 1979 「九州縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書（3）」
- 7) 都城市教育委員会 1981 「祝吉遺跡」 都城市文化財調査報告書第1集
- 8) 同上 1982 「祝吉遺跡」 都城市文化財調査報告書第2集
- 9) 同上 1990 「平成元年度遺跡発掘調査報告」 都城市文化財調査報告書第11集
- 9) 同上 1991 「平成2年度遺跡発掘調査報告」 都城市文化財調査報告書第13集

## 第Ⅱ章 調査の記録

### 第1節 調査区の設定と層序

#### (1) 概要 (第2図～第4図)

調査区は前述の通り、農道部分に対応する形で設定した。幅約5mの略南北方向の本線部分と、略東西方向の支線部分とに分けられる。以下、本線部分については、東西方向に走る市道(下大五郎と上大五郎の集落を結ぶ)への取り付け口を基点とする、北方向へのセンターラインの距離(m単位)で地点表示を行う。

本線の南端側(0～100m)は、I層中から近世陶磁器片がわずかに出土するのみであり、計3か所設定したトレンチで断面を観察すると、現地表面下1.2m～1.8mで御池ボラ層(V層、後述)があらわれる状況であった。南側ほど、御池ボラ層までの深さが深くなるようであり、この南側は、浅い谷状の地形のところであったと推測される。本線の95m付近から西側へのびる支線(支線1)では、御池ボラ層までの深さが浅くなり、西側ではI層の直下に御池ボラ層があらわれII層が見られなくなる。

主要な調査区と位置づけられるのは本線の100m～277.94mの間であり、122m～138m付近では、いずれも古代以降の所産と見られる、北西～南東方向にのびる溝状遺構(B1号溝)と小穴3基が、150m～156m付近および225m～233m付近では、弥生時代後期の竪穴住居跡が検出された(それぞれB1号住居跡、B2号住居跡)。御池ボラ層の上面で観察してみると、176m～194.43m辺りが若干高くなっている、ところによってはI層の直下に御池ボラ層が見られる。そしてその北側は急激に下がり、B2号住居跡付近でわずかではあるが上がりしている。限られた範囲の調査であったため断定はできないが、B1号住居跡とB2号住居跡の間には凹部(浅い谷状部分)が存在するようである。なお、本線の277.94mのさらに北側は、中小河川改修事業に伴う調査範囲となる。

その他、本線の190m付近および250m付近から東側にわかれる支線にも調査区を設定している(支線2・支線3)。支線2については長さ4.0m、幅2.2mのトレッソ、支線3については第3図では図の掲載を略したが、長さ33.0m、幅3.4mの調査区を設定している。しかしながら、両調査区ともに特に遺構は検出されず、出土遺物もI層中から近世の陶磁器が、III層中から弥生土器片が少量出土した程度であった。

#### (2) 層序 (第5図～第7図)

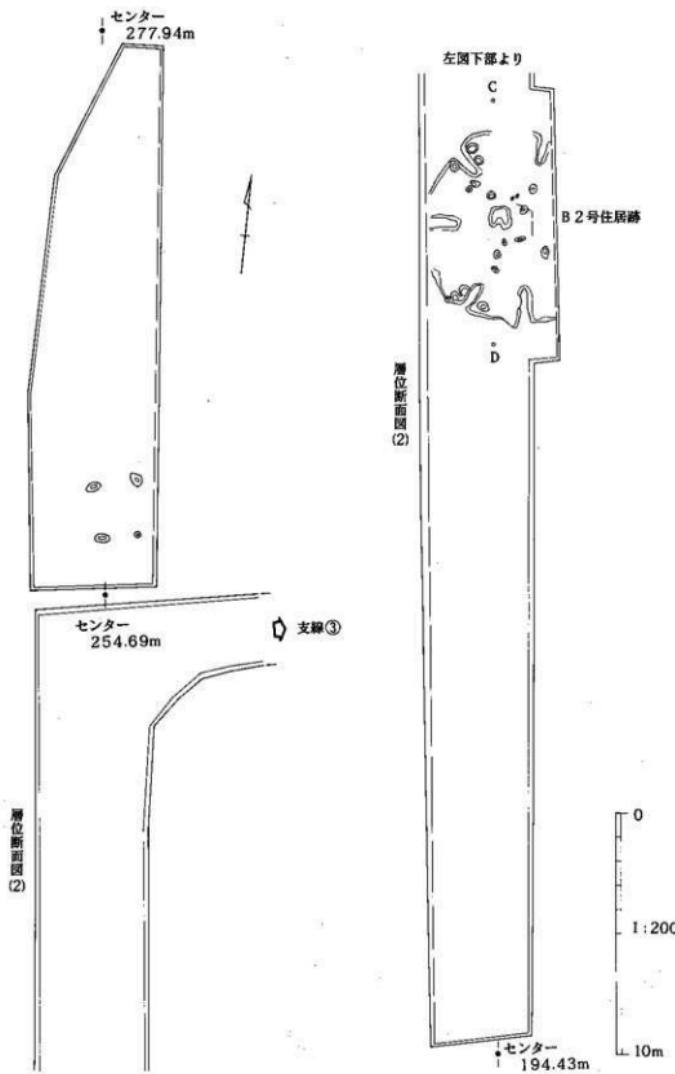
掲載した層位の図面は本線の100m～254.69m間の西壁のもので、左側が(略)南、右側が(略)北となり、上段の右側と下段の左側が図上でつながる。

基本的には後述するI層・II層を重機使用により除去し、主たる遺物包含層であるIII層について掘り下げを進めていった。そしてV層とした御池ボラ層の上面で遺構の検出を行った。基本層序は以下の通り。

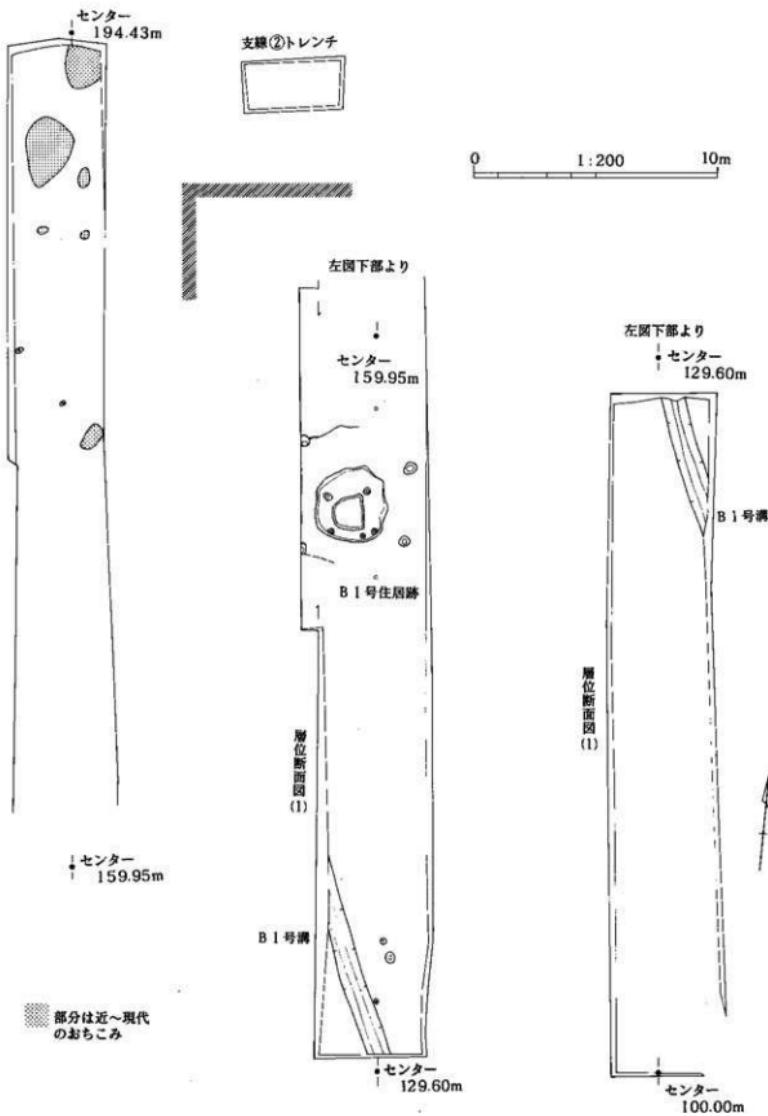
I層 褐灰色を呈する現耕作土。最下部に幅1cm～2cm程鉄分が凝聚している。近世の陶磁器や弥生土器の小破片を含む。近世から続く水田であったか、あるいは近世の



第2図 調査区の位置



第3図 遺構分布図（1）



第4図 遺構分布図（2）

文化層を近～現代の水田が破壊したものと考えられる。

- II 層 黒色土で粘性大きい。支線1の西側や本線の176m～194.43m付近のように、基盤が高くなっているところでは欠落している。遺物はほとんど見られない。第15図に掲げた22は、希少なII層出土遺物である。
- III 層 黒色土。わずかに御池ボラのバミスを含む。弥生時代後期の遺物を包含する。
- IV 層 褐色土。御池ボラのバミスを多く含む。遺物は出土していない。層厚は厚いところでも20cm程度。
- V 層 黄色を呈する軽石などの霧島起源の火山噴出物。御池ボラ層と通称される。噴出年代はおおよそ縄文時代中期頃とされる。本遺跡の周辺では層厚は数メートルに達する。前述の通り、遺構検出作業はこの層の上面を行った。

以上の基本層以外の層の所見は、層位断面図（第5図）中に記載している。

## 第2節 弥生時代の遺構と遺物

### (1) 穫穴住居跡

2基検出されており、いずれも竪穴住居跡の中央部分をとらえている。なお、それぞれの出土遺物については次項で触れる。

#### B1号住居跡（第9図）

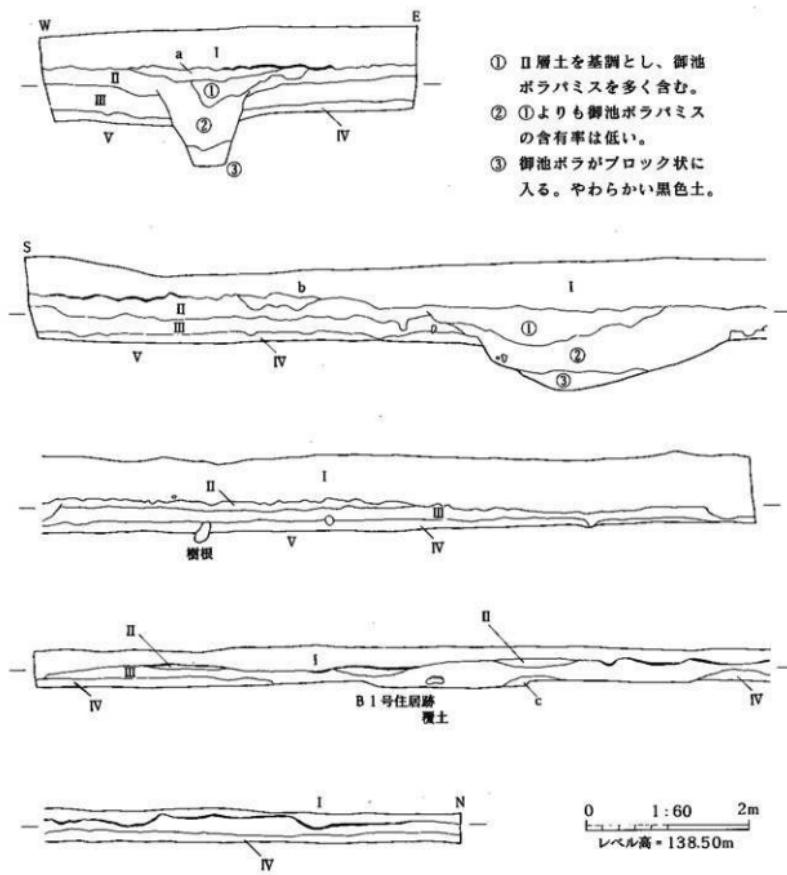
IV層上面まで掘り下げた段階で150m～156m付近に黒色土が残っていたため、遺構の存在は容易に認識できたが、霜や凍土の除去を繰り返しているうちに検出面が若干下がり、結果的にV層上面で平面形をとらえることとなった。このため、外周の壁面の立ち上がりは痕跡程度となるか全く認められなくなっている。層位断面図（第5図）を見ると、この竪穴住居はIV層上面より掘り込まれており、それより上位のIII層中には壁面の立ち上がりがのがひてこないことが分かる（第5図）。ただしIV層上面の掘り込み開始レベルからベッド状遺構部分上面までの深さが4cm～14cm、最深部の中央土坑の底面までにしても10cm～22cm程度であることから、そこが本来の掘り込み開始レベルとは考え難く、元々IV層上面よりもさらに上位から掘り込まれていたものが、III層形成時に削平を受けたと考えられる。

このような理由により、この竪穴住居跡の平面形については不明瞭な点が多くなっている。北側を観察すると方形と推測できそうであるが、南側～東側では中央部床面（ベッド状遺構部分の内側）や中央土坑の形態が円形に近いように思える。

覆土は、土色、土質などIII層土と似るが、御池ボラのバミスの含有率がやや高い。IV層と比べるとかなりやわらかい。中央土坑部分には炭化物が多く含まれる。

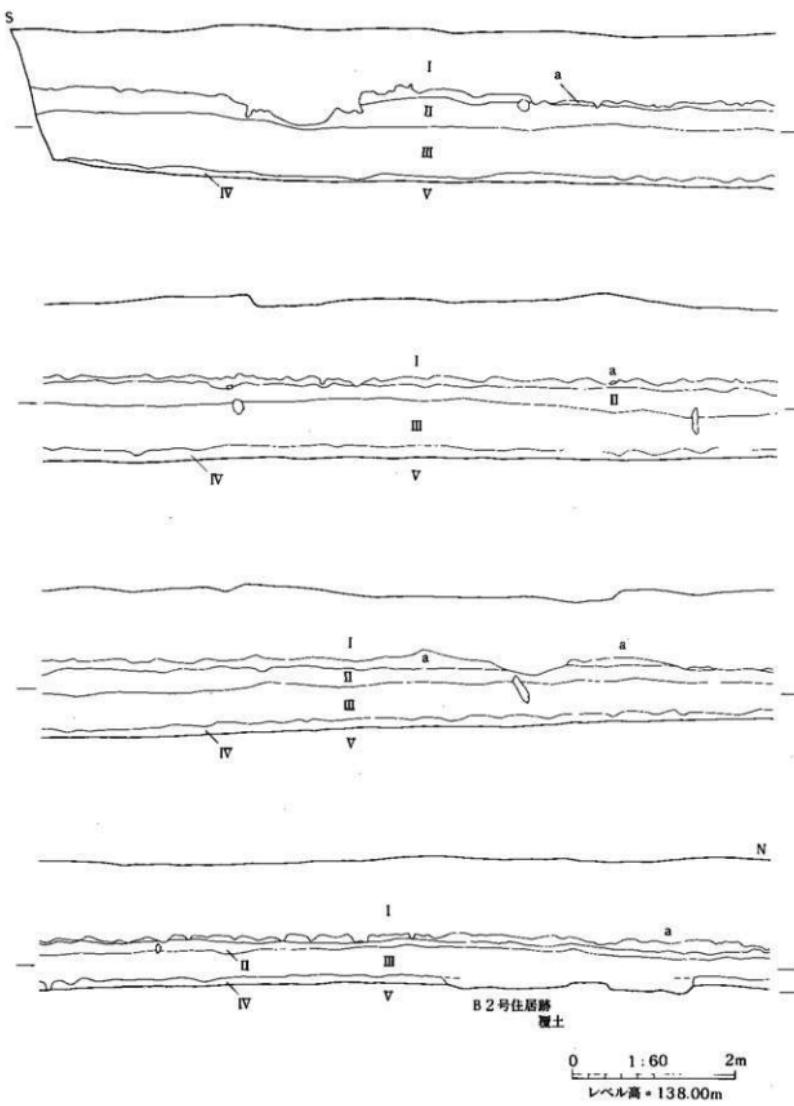
この竪穴住居跡の構造上の特徴として、全方向に地山削り出しによるベッド状遺構を有するという点が挙げられる。外周が不明瞭であるため全容はわからないが、ベッド状遺構部分の広さが中央部床面に比して広いことも指摘できよう。中央部床面との比高差は5cm～12cm程度である。ベッド状部分は全面にわたってほぼ平坦となり、B2号住居跡に見られるような間仕切り壁は確認できなかった。また壁帶溝も認められなかつた。

中央部床面は南北方向3.0m、東西方向2.8m、面積は7.3m<sup>2</sup>を測る。さらに一段深く掘り

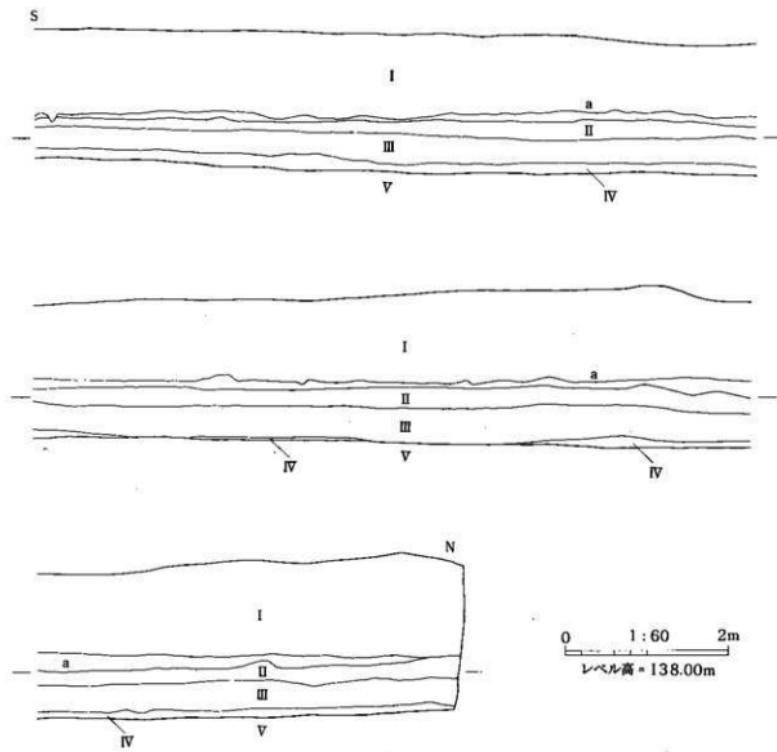


- a. 灰褐色土。旧耕作土か。ところによつては砂質。
- b. II層土を基調とし、御池ボラバミスを少量含む。
- c. 御池ボラバミスを他所より多く含む。

第5図 層位断面図（1）



第6図 層位断面図（2）



第7図 層位断面図（3）

下げて中央土坑を設けている。中央土坑は南北方向1.5m、東西方向1.3m、中央部床面からの深さは5cm~10cmである。中央土坑の北東隅では焼土が確認された（図中の網かけ部分）。中央土坑の床面より約10cm程上位の覆土中に見られた。

主柱穴と想定されるビットは4基、中央部床面で検出された。径は30cm~35cm、床面からの深さは30cm~45cmを測る。それぞれの中心間の距離はおよそ1.6mとなる。それらとは別にベッド状遺構部分でも4基のビットが認められた。径が50cm内外と、中央部床面検出のビットよりも平面規模は大きい。逆に深さは浅く、約25cm程度である。堅穴住居の中心部に基点を設け、柱穴と想定した4基のビットの方向に線を引くと、若干のずれはあるもののベッド状遺構部分検出の4基のビットがその上にのってくる。どのような構造になっていたのかは不明であるが、それら2群のビットが互いに関連するものであったことはほぼ確実であろう。

遺物の出土量は多くない。図を掲載した4点以外は、全て土器の胸部小破片である。総数は約50点弱。それらのはほとんどが床面から5cm~12cm程度浮いた位置にあった。擦過面を有する礫(4)は、ほぼ床面上で出土している。

また、覆土中に炭化材が多く遺存していた。平面分布状態は放射状を示しており、多くは垂木と考えられる。それら炭化材は、ベッド状遺構部分では5cm、中央部床面や中央土坑内では8cm~10cm程度浮いた位置にあり、そのことから、この竪穴住居は崩壊されてしまふ時間が経過した後に上屋部分が倒壊した(火災にあった)と推測される。前述の覆土中の焼土もそのことに関連するものか。

#### B 2号住跡(第11図)

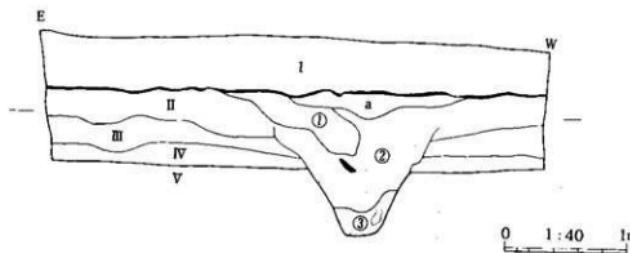
円形の平面形を基調にして、地山削り出しによる間仕切り壁を数箇所所有するという、いわゆる「花弁状平面住居」である。最大径は8.2mで、この種の竪穴住居としては平均的規模に属する。

層位断面図からはB 1号住跡同様、IV層上面より掘り込まれていることが読みとれる(第6図)。やはりIV層上面の掘り込み開始レベルから間仕切り壁上面までの深さが8cm、床面までは14cm~20cm程度と浅く、元々IV層上面よりもさらに上位から掘り込まれていたと考えられる。

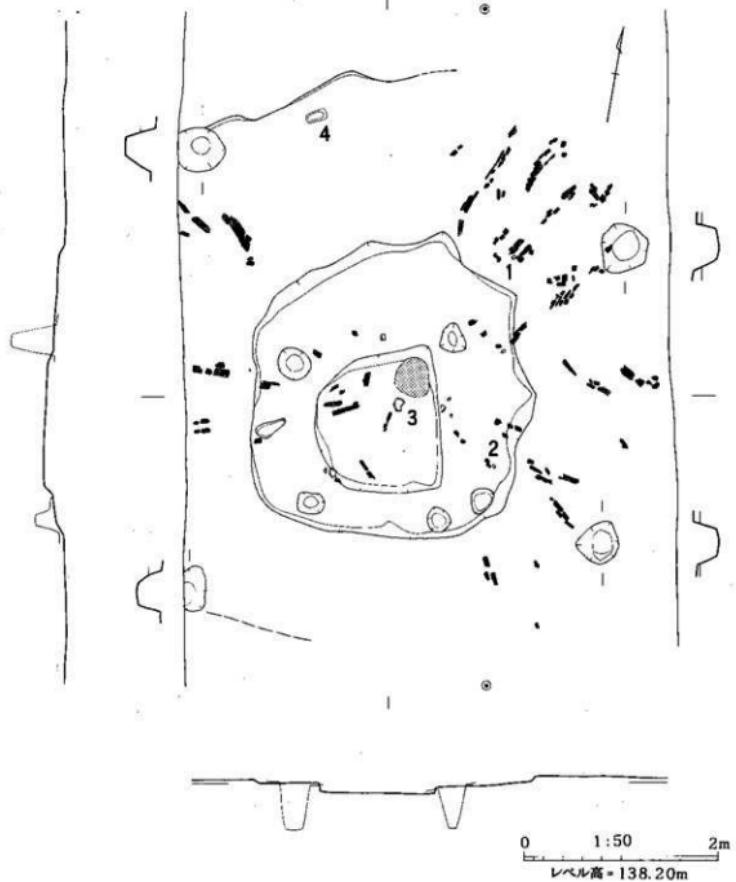
覆土は基本的にはⅢ層土に似るが、御池ボラのバミスの含有率がやや高い。また、若干かたく、土層観察用の壁面を削るとⅢ層との間に「段」ができる。

壁面の内側には、2cm~4cm程の深さの壁帶溝を巡らせていている。壁帶溝はところどころ小ビット状に深くなる。間仕切り壁は遺構検出の段階で確認できた。長さは約1.2m~1.8m。この間仕切り壁の両側には、屋内小土坑が設けられており、中には長頸壺などの土器や礫が見られた。

中央部付近(と推測される位置)に中央土坑が存在する。基本的には方形であるが、南側の壁面が突出し、やや不整形となる。床面からの深さは約10cm程。焼土等は確認されていない。



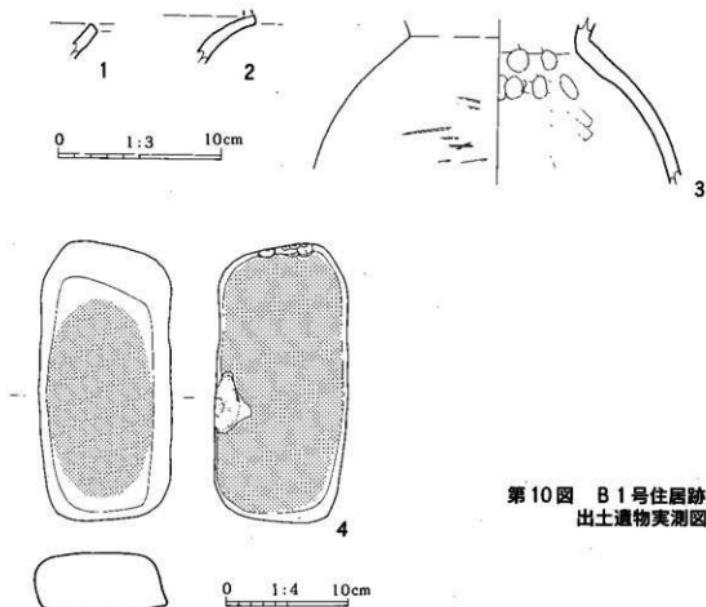
第8図 B 1号溝断面図



第9図 B1号住居跡実測図

中央土坑さらにその東側には、壁高数cm程度の低い段が形成されている。

主柱穴と想定されるピットは4基検出されている。全て床面からの深さは約50cm内外の値を示す。それぞれの中心間の距離は1.8m～2.6mを測る。床面には、その4基以外にも数基の落ち込みが見られたが、いずれも不整形で浅いものである。



第10図 B1号住居跡  
出土遺物実測図

図示した遺物は、5・7・8を除いて床面近くのレベルで出土しており、遺構廃絶の時期を示すものと考えられる。それら以外にも、覆土中から土器の小破片が多数出土している。

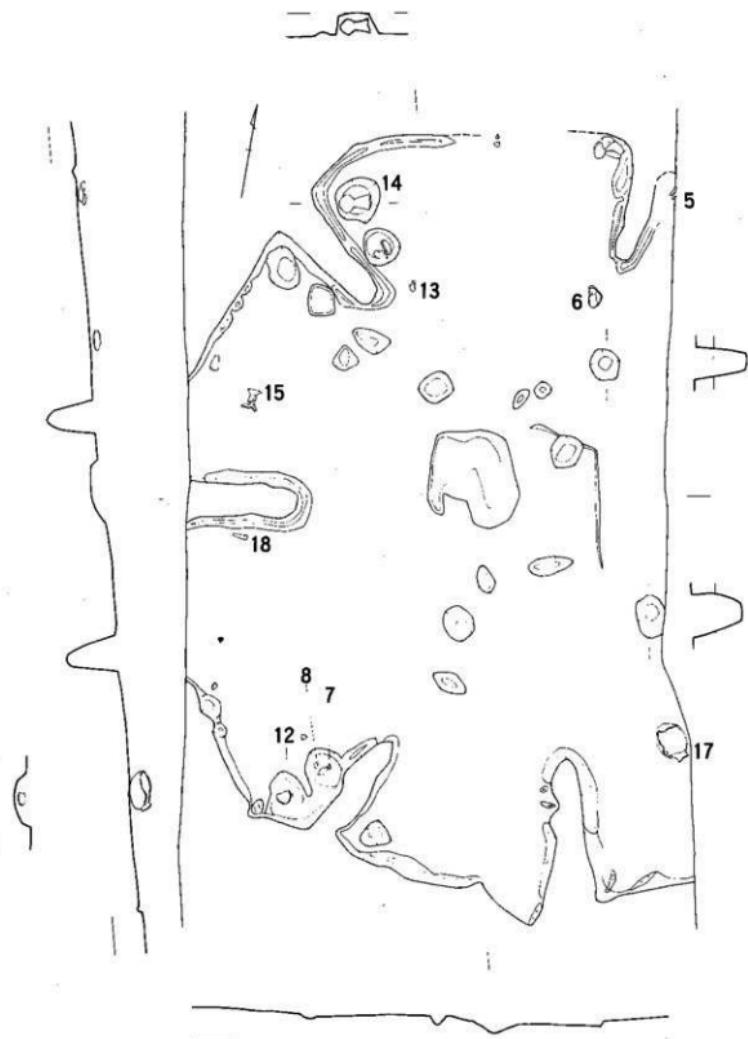
## (2) 遺物

### B1号住居跡出土遺物（第10図）

1は壺形土器（以下～形は省略）の口縁部小破片であろう。口唇部は角張っており、外面に鋭い後線を形成している。外面に縱方向の工具ナテ痕が残る。浅黄橙色・にぶい黄橙色を呈する。胎土中には赤褐色粒やガラス質の鉱物（石英か）等の混入物が多く見られる。

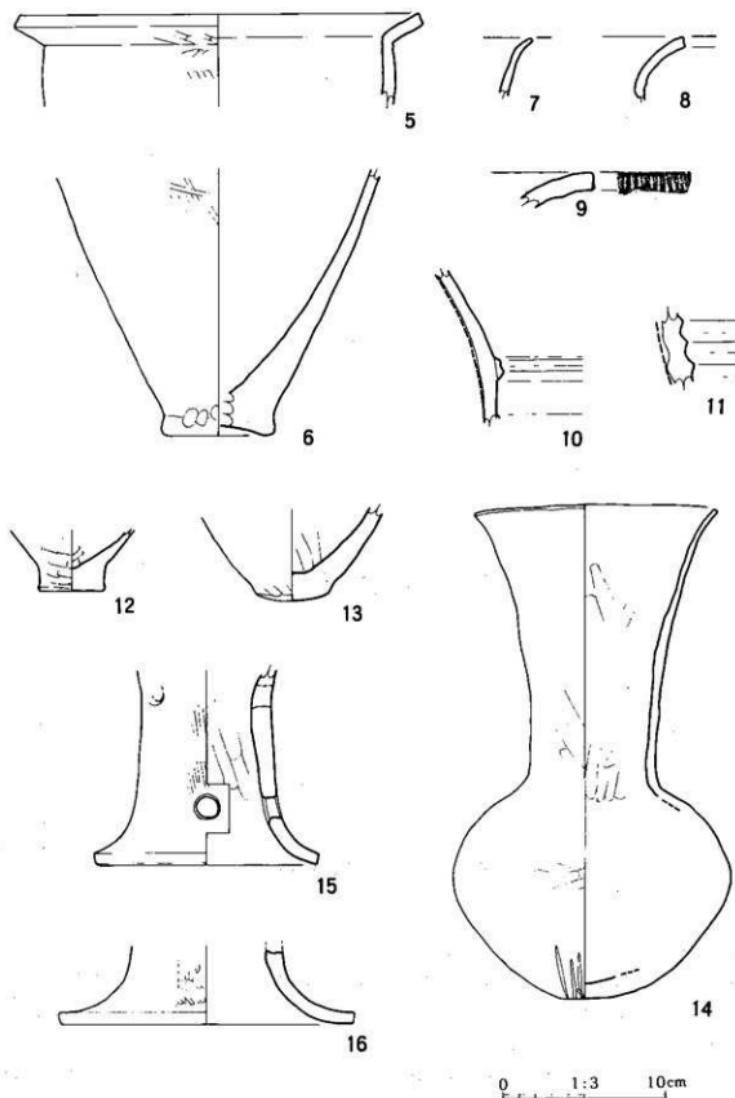
2はおそらく二重口縁となる壺の口縁部。橙色を呈する。器面はやや荒れており、調整は不明瞭。胎土中に赤褐色粒やガラス質の鉱物（石英か）、灰色粒などが非常に多く見られる。3は壺の頸部～肩部で頸部外面の屈曲部分の稜線は鋭くなっている。外面はナテ調整で、工具の微細な纖維痕が残る。さらによく観察すると、部分的にではあるが器面上に幅1mm程度の凹部が認められ、ナテ調整以前にタタキによる成形が行われていたことが窺える。内面は、外面と同じ工具によると推測されるナテ調整。工具痕の幅は5mm～7mm程度。淡黄色・にぶい黄橙色を呈する。胎土中に赤褐色粒や灰色の小円礫を含む。

4は磨面を有する砂岩の礫である。網かけ部分が使用（研磨あるいは擦過）の痕跡の著しいところで、その他、側縁部にも一部使用の痕跡が認められる。重量は2,380.0kg。

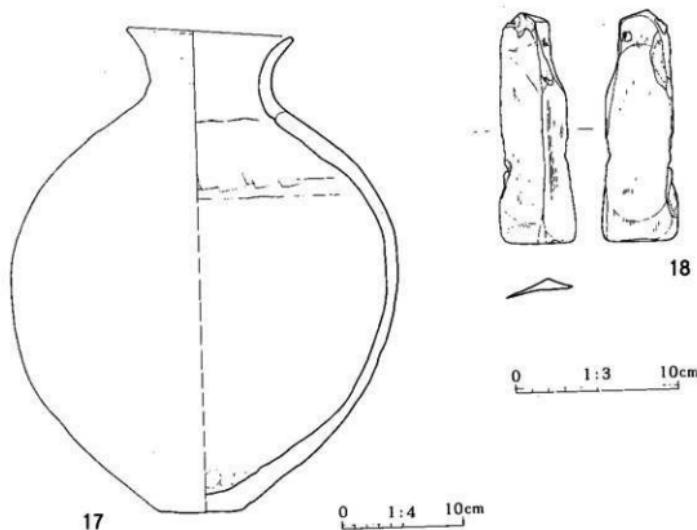


0 1:50 2m  
レベル高・137.60m

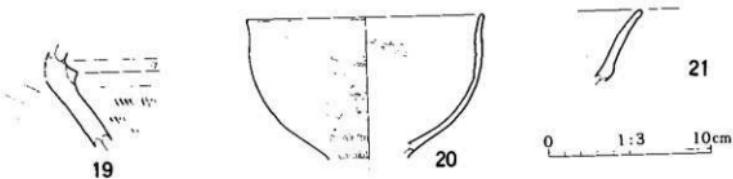
第11図 B2号住居跡実測図



第12図 B2号住居跡出土遺物実測図（1）



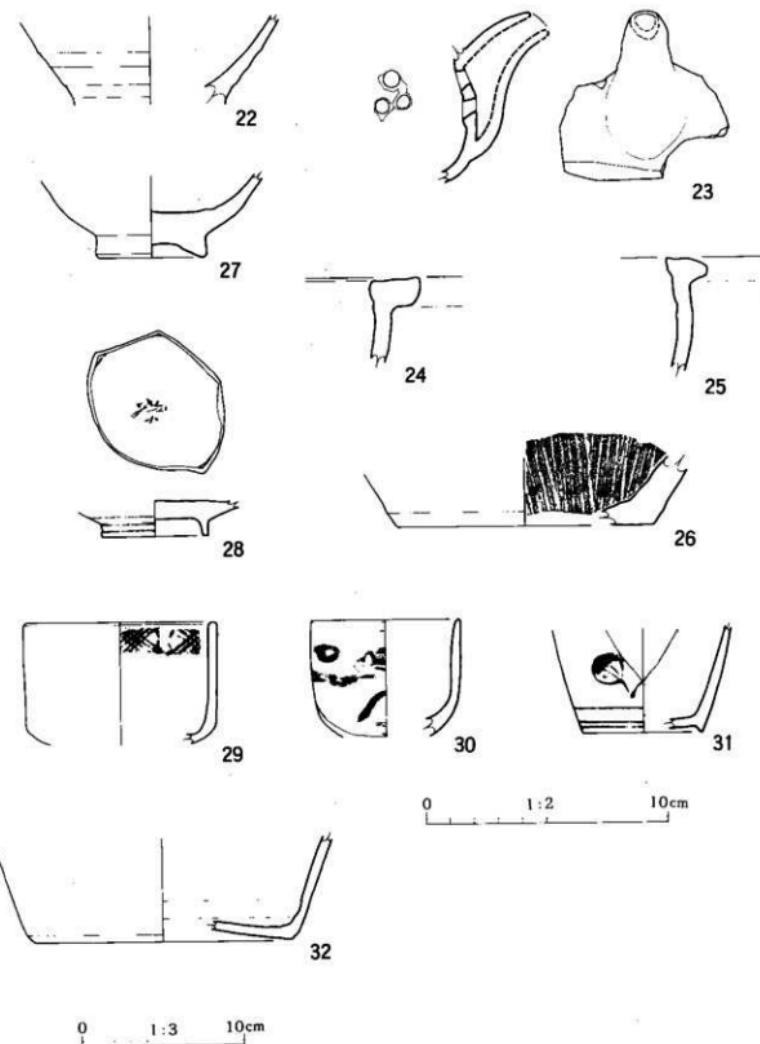
第13図 B2号住居跡出土遺物実測図（2）



第14図 包含層出土遺物実測図

#### B2号住居跡出土遺物（第12図・第13図）

5は甕である。口唇部は1と同様に角張っている。口縁部は屈曲し、鋭い稜線を形成する。胴部以下は不明であるが、あまり張らない器形のようである。外・内面ともにナデ調整で、工具痕が残る。さらにタタキ痕と見られる凹部も認められる。浅黄橙色を呈し、胎土中に赤褐色粒や灰色小砾、黒色の光沢を放つ鉱物などが混入している。6はわずかに上げ底となる甕の底部で、外面は二次的火熱を受けている。外・内面ともにナデ調整で、外面上部には工具痕が残る。胎土中には5同様の混入物が見られ、あるいは5と同一個体とも考えられる。色調も似る。



第15図 表土・包含層出土遺物実測図

7は壺の口縁部と考えられる小破片。先端部は細くなりごく狭い平坦面を形成している。外・内面ともにミガキを施す。外面は浅黄橙色、内面は浅黄色を呈する。胎土中に赤褐色粒や灰

色粒、透明の鉱物を含む。8は壺の口縁部。頸部からなだらかに外反する。口唇部はわずかに凹ませる。外・内面ともに丁寧なナデ調整。橙色を呈する。胎土中に赤褐色・灰色の小礫や透明の鉱物を含む。9も壺の口縁部で、口唇部の平坦面に継方向の刻み（沈刻線）を施す。外・内面ナデ調整。橙色・明黄褐色を呈する。胎土中に5mm～8mm大の白色鉱物（長石か）や灰白色のガラス質の鉱物（石英か）などの大きめの混入物が見られる。10は突帯の付く壺の肩部～胴部である。内面は剥落が著しい。外面はナデ調整。突帯は中央部を凹ませて断面が「M」字状になる。2条遺存するが、下方のそれは上端部がわずかに認められる程度である。突帯は、上部は丁寧にヨコナデされて器面へ張り付けられるが、下部はなで付け不足によるわずかな隙間が見られる。明褐色を呈する。胎土中に赤褐色粒や灰白色のガラス質の鉱物（石英か）、白色鉱物（長石か）を含む。11も三角突帯の付く壺の肩部付近。三角突帯は3条遺存する。突帯部分は器面への張り付け後にヨコナデが施されている。突帯間の調整はミガキに近い。にぶい褐色を呈する。胎土中に赤褐色粒や灰白色のガラス質の鉱物（石英か）、雲母を含む。

12は小形の甕か鉢の底部と見られる。外・内面とも工具によるナデの痕跡が明瞭である。淡黄色～灰黄色を呈する。胎土中には灰色や白色の小礫（2mm大程度）や透明の鉱物を多く含む。13は凸レンズ状となる壺の底部である。底面の径は4.5cm、厚さは1.6cmを測る。外・内・底面いずれもナデ調整がなされる。淡黄色を呈し、底面付近は黒斑が見られる。胎土中に赤褐色粒や白色鉱物（長石か）を含む。わずかではあるが黒色の柱状の鉱物も認められる。

14は長頸壺の完形品で、前述の通り屋内小土坑中より出土している。口縁部付近はなだらかに外反し、口唇部はごく狭い平坦面を形成する。頸部、および胴部最大径付近は鋭い稜とはならない。底部はごく小さい平底となる。径は3.0cm程。外・内面ともに、基本的にはナデ調整が施される。図面にはあらわしていないが、胴下部にはケズリによって成形した痕跡が認められる。また外面胴下部に3本の沈刻線（長さ4.5cm～5.5cm）による文様が描かれている。浅黄色・浅黄橙色を呈する。胴下部～底面付近には黒斑が見られる。胎土中には赤褐色粒や灰色小礫、白色鉱物（長石か）、灰白色のガラス質の鉱物（石英か）、透明鉱物、黒色の柱状の鉱物など様々な混入物が多く見られる。

15は器台で、円形の透し孔が穿たれている。裾部はなだらかに外反し、端部は平坦面を形成する。内面側の透し孔の周囲には、穿孔時のものと見られる器壁の剥落が認められる。外面脚柱部はミガキを施しているがやや不明瞭。裾部～端部はヨコナデを施す。内面脚柱部はナデ調整で指頭圧痕が残る。裾部はミガキ調整。淡黄色・浅黄橙色を呈する。胎土中に赤褐色や灰色の小礫を含む。16も器台の脚部。15よりも裾部が大きく開く。外面はミガキ、内面はナデによる調整が施される。色調は15に似て、浅黄橙色系を呈する。胎土中に赤褐色や灰色の小礫を多く含んでいる。

17は横倒しの状況で出土した壺で、上部は欠失（おそらく後代の削平による）していたが、それでも口縁部から底部までの全容の判明する資料である。なお、この17の図のみ縮尺1/4であり要注意。口縁部は短くなだらかに外反する。頸部の屈曲は鈍く、明瞭な稜線は形成しない。胴上部には粘土紐（板状のものか）接合の痕跡が残る。底部は大きさの割には小さな平底となる。外・内面ともナデ調整がなされ、内面には工具痕が部分的に残っている。浅黄橙色・

橙色を呈する。胴下部には黒斑が見られる。胎土中に灰色の小砾や灰白色のガラス質の鉱物（石英あるいは長石か）、黒色の鉱物等を含む。

18は頁岩製の磁石である。使用の頻度が高く、表裏両面とも使用による凹部が形成されている。擦過痕もよく残る。重量90.1g。

#### 包含層出土遺物（第14図）

19はB2号住居跡の南側約1mの地点のⅢ層中より出土している。壺の頸部から肩部にかけての破片で、三角突帯が2条遺存する。外面はハケ後ナデ調整、内面はナデ調整。突帯部分はヨコナデされる。外面にはぶい黄橙色、内面は褐色・黒褐色を呈する。胎土中に灰白色のガラス質の鉱物（石英か）や白色の鉱物（長石か）を含む。

20はB2号住居跡の南側約7m付近のⅢ層中より出土している台付き椀である。外・内面ともにミガキによる調整が施される。橙色・黄橙色を呈する。胎土中に透明のガラス質の鉱物（石英か）や黒色の光沢を放つ鉱物を含む。

21もB2号住居跡の南側約7mの地点のⅢ層中より出土している。高杯の杯部と見られる。外・内面ともにナデ調整。胎土中に赤褐色や灰色の小砾、透明のガラス質の鉱物（石英か）や黒色の光沢を放つ鉱物を多く含む。

### 第3節 古代～近世の遺構と遺物

B1号溝は、層位断面図（第5図・第8図）で明瞭であるように、Ⅱ層中のある面かあるいはそれより上位より掘り込まれており、古代以降の所産と考えられる（第4図）。しかしながら出土遺物は皆無であり、詳細な時期は不明である。

22は高台付きの土師器の杯である。外・内面ともに回転ヨコナデ痕が残る。にぶい黄橙色。胎土中に黒色の鉱物など混入物を少量含む。前述の通りⅡ層出土。

以下の陶磁器類は、全てⅠ層中より出土している。23～27および32は在地系の陶器である。いずれも胎土は赤味がかつており、褐色や黒褐色の釉を施している。23は茶家、24・25・32は甕、26は摺鉢、27は椀である。27は蛇の目見込みとなる。

28は肥前系染付の湯呑椀である。見込みに昆蟲状の文様を描いている。18世紀後半から19世紀初頭の所産か。29は肥前系青磁染付の湯呑椀である。内面に四方櫛文が描かれる。18世紀後半のものか。30は肥前系染付の湯呑椀。18世紀後半から中葉のものか。31は肥前系染付の猪口である。18世紀中葉から末葉のものか。

## 第三章 まとめ

今回の発掘調査は、農道部分という範囲の限定されたものではあったが、結果的に全長180mに及ぶ長いトレンチを遺跡に入れることになったため、おおよその遺跡の性格を捉えることができたと考えている。

弥生時代については、検出された2基の竪穴住居跡が、ともに注目される構造のものであつ

た。また、それら両者の間に浅い谷状部分が存在することも注意しておかねばならない。

B 1号住居跡は、全方向にベッド状遺構を有する点が特徴で、類例として宮崎県小林市の水落遺跡 S A 3<sup>1)</sup> を挙げることができる。特に中央部床面が一辺約3m程度の方形であること（ただしB 1号住居跡はやや不整形）や、その壁面近くに4本の主柱穴が存在する点などが共通する。B 2号住居跡は円形基調の「花弁状平面住居」<sup>2)</sup> である。やはり主柱穴は4本となる。

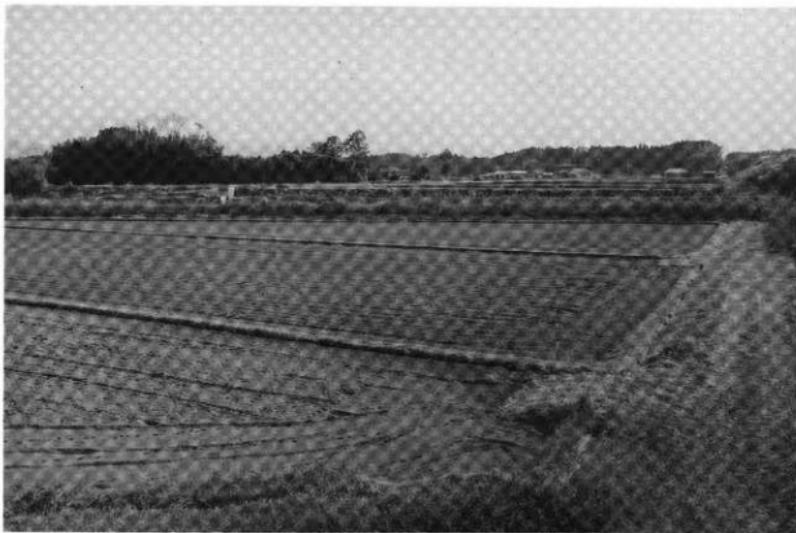
それらの所属時期を知るための手がかりとなる出土土器の位置付けを、他遺跡の資料と比較することによって行いたい。まず、現在のところ弥生時代「後期初頭」の標準資料とも言える宮崎県新富町新田原遺跡の土器<sup>3)</sup>、あるいは「後期前半」の中溝遺跡出土土器<sup>4)</sup>と比較すると、壺の頸部の刻目突帯の消滅や壺の丸底指向、長頸壺の存在などが明らかに後出のものと位置づけることができよう。一方、「後期後半」の宮崎県佐土原町下那珂貝塚のⅢ期・Ⅳ期の土器<sup>5)</sup>と比べると、壺の口唇部の角張りや胴部の張りのなき、壺の肩部の多条の三角突帯といった特徴は若干古い様相の現出と言える。このことから、本遺跡出土土器（B 1号住居跡出土土器の方は決め手に欠けるが）はこれまで当地域で類例の少なかつた「後期半ば」の新段階から、下つても「後期後半」の古段階に位置づけられるであろう。さすれば、14の土器の沈刻線による文様は、当地域では最古期の資料となる。

さて、以上の出土土器の年代観を踏まえて、再び竪穴住居跡（特にB 1号住居跡）の構造的特徴について見ていく。B 1号住居跡については、ベッド状遺構が見られるのみで、この時期盛行する突出壁を持たない点は特異と言える。ベッド状遺構部分のピットを補助的な柱穴と仮定すると、屋根勾配の緩い、低い屋根の住居であったとの推測が可能になろう。そうであるならば、北郷泰道の説く突出壁の成立の図式一屋根勾配を緩くすることによって生じる「主柱背後の遮蔽面」の掘り残し<sup>6)</sup>—からはずれる資料となる。また、石川悦雄の想定するように円形基調の「花弁状平面住居」が、通常は周堤で占められる部分まで竪穴部が拡張された結果成立し、その要因として瀬戸内地方からの影響を考えるのであるならば<sup>7)</sup>、何故この住居跡には突出壁が見られないのかが問題となってくる。もし、B 2号住居跡などと同時期であるとすればなおさらである。そして、そのためにB 1号住居跡出土土器の年代観が重要となってくるのである。

#### （文献）

- 1) 小林市教育委員会 1992 「水落遺跡」 小林市文化財調査報告書第5集
- 2) 石川悦雄 1992 「宮崎における弥生時代竪穴式住居の展開」『宮崎県史研究』5
- 3) 新富町教育委員会 1986 「新田原遺跡」 新富町文化財調査報告書第4集
- 4) 宮崎県道路公社 1972 「佐土原町中溝遺跡調査報告書」
- 5) 谷口武範他 1988 「埋蔵文化財調査研究報告Ⅱ 下那珂貝塚」 1988 宮崎県総合博物館
- 6) 北郷泰道 「南九州における間仕切土壁住居の成立と終焉」『宮崎県史研究』3
- 7) 前掲2に同じ

図版 1

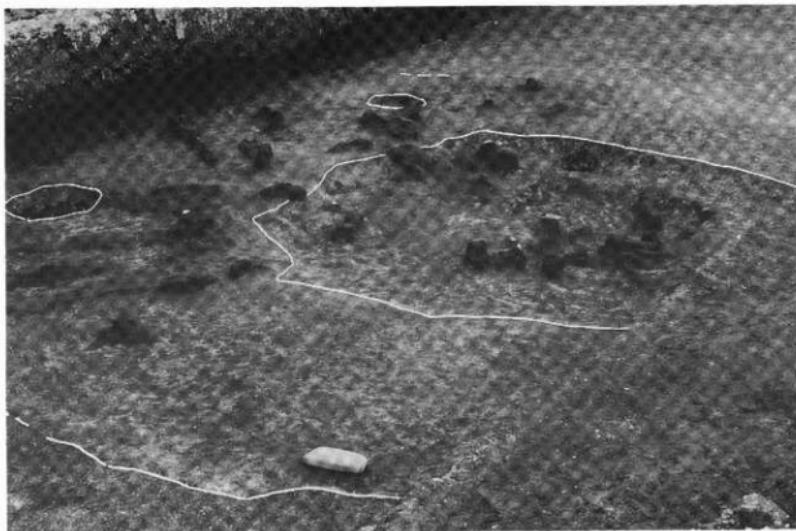


1. 遺跡全景（北西より）

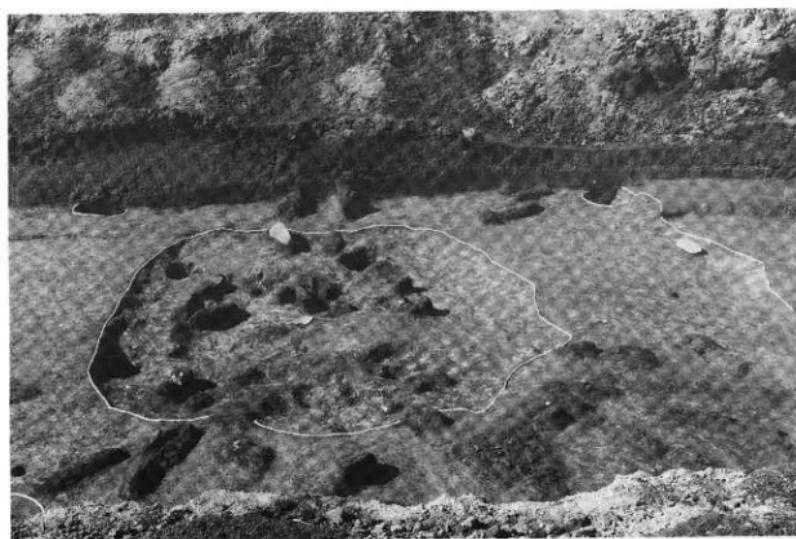


2. 作業状況（南より）

図版2



3. B 1号住居跡（北西より）

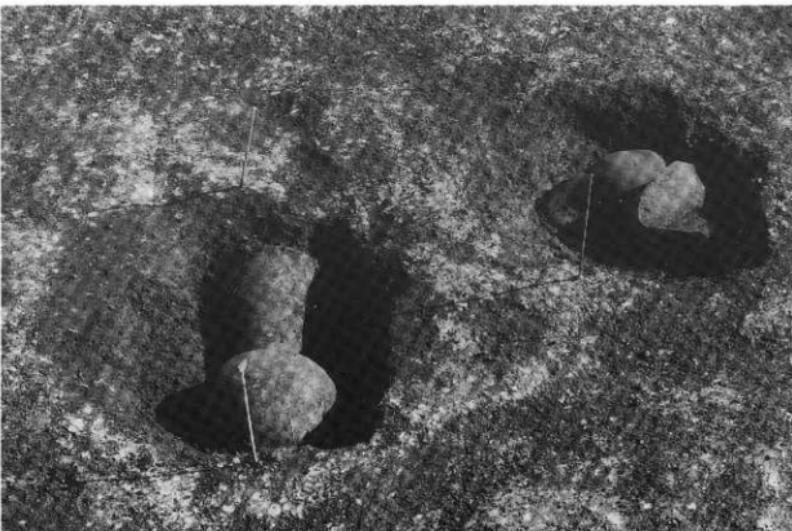


4. B 1号住居跡（東より）

図版 3



5. B 2号住居跡（南より）

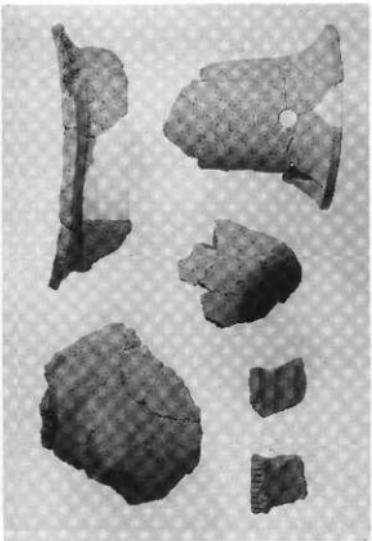


6. B 2号住居跡屋内小土坑  
土器出土状況（西より）

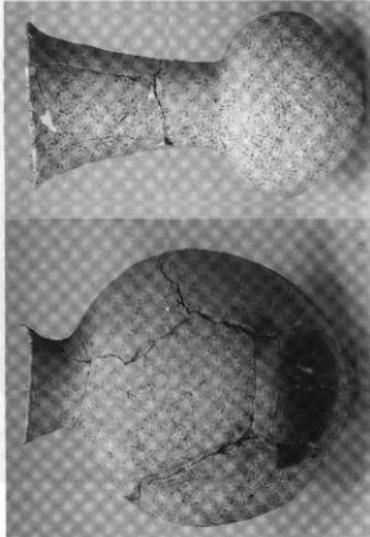
图版4



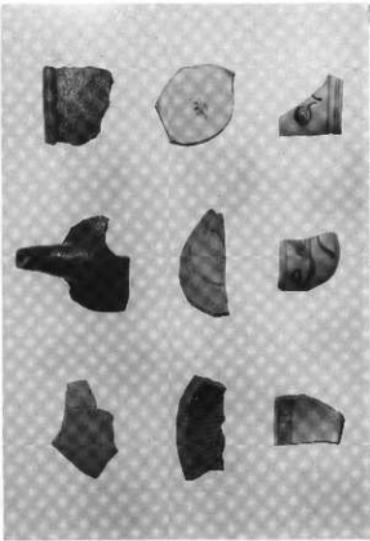
7. B 1号溝（南東より）



8. B 1号・B 2号住居跡出土遺物



9. B 2号住居跡出土遺物



10. 表土・包含層出土遺物

## 下大五郎遺跡 B地区

丸谷地区農営ほ場整備事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

1996年3月31日

発 行 宮崎県教育委員会  
宮崎市橋東1丁目9番10号

印 刷 (株)宮崎南印刷  
宮崎市大字田吉350-1